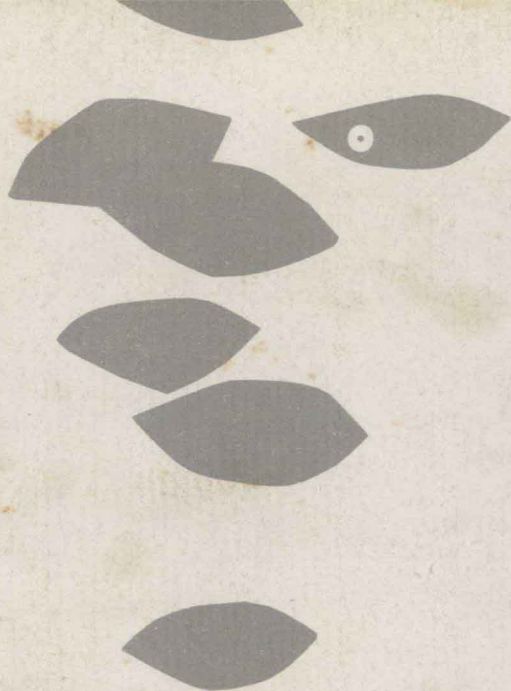




花の仮面

昭和三十六年三月十日再版發行

定價 二九〇円

著者 寺内大吉

發行者 佐藤東洋

平版印刷 ダイワ印刷所

用紙 三村洋紙店納

發行所

大和出版株式會社

東京都新宿区新小川町二ノ十一

電話東京(30)一八七四番

振替口座東京六八三五七番

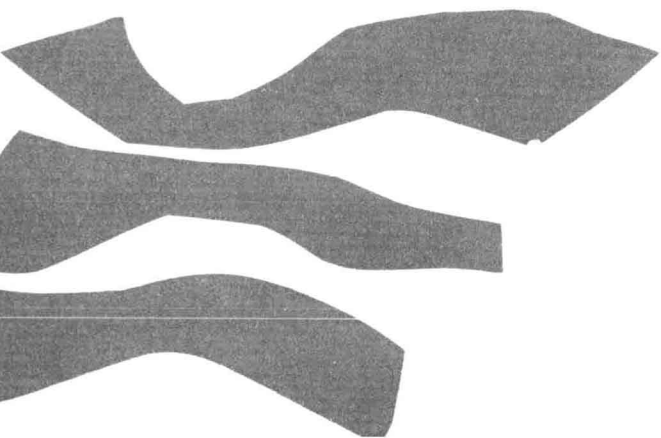
(乱丁、落丁は本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします)

印刷・小宮山印刷所

製本・大場製本所

花 の
寺 内 大 吉

大和出版社刊



目次

花の仮面

5

緑の徽章

185

造られた美貌

225

人間に賭けるな

263

あとがき

装
幀

永
田

力

花
の
仮
面

明日を待てぬ者

一

真田慶子は朱^{あか}ペンをおいた。採点で疲れた眼を窓辺へ投げた。

紅い鳥籠のなかで、つがいのカナリヤがこまめに動きまわっていた。夫婦なのか、愛人どうしか。とにかく仲睦^{なかむつ}まじく一粒の餌を突つき合っているのである。

慶子はすぐに室矢を想った。

（今頃はもう信州へ帰っているのかしら）

淡い哀しみがこみ上げてきた。

待ちに待った再会だったのに、この二日間は余りにもあわただしく過ぎ去っていた。慶子の組んだプランは次々に崩された。

上京第一日目の一昨日は、お昼休みに本郷通りを歩き簡単な食事をとっただけ。昨日だって、ようやく晩おそく逢えて、終電車までの乏しい時間を喫茶店に腰かけただけ。半歳ぶりの逢う瀬が、べめて二時間足らずだったとは……不幸な韓^{ろうあ}啞^{あじ}児の渡航のために奔走する室矢を思えばそんな嘆きは許されぬはずだが、慶子はやはり寂しい。

力ない手で抽出^{ひきだし}をあけた。期限のきれた切符が二枚。音楽好きな室矢のために用意しておいたものである。

切符を取出しては音楽会の素晴らしき夜を夢見ていた三四日前までの自分を思いださずにはいられない。いじらしかった慶子よ！

それに、昨夜の演奏曲目がベートーベンの「熱情」だったことも、何か皮肉であつた。空しく使用されなかつた「熱情」の切符——自分と室矢との間で熱情の調べが演奏されるのは、いつのことであろうか。

だが慶子はやがて、また朱ペンを握り直していた。

いつも室矢武彦が語る言葉なのだ。教師たる自分らにはお互いの愛を満たしあう前に、若い熱情を傾けねばならないものがあるはずだ。室矢には不幸な子供たちが、自分には病みやすい季節にいる少

女たちが——そう云いかせながら模擬テストの答案をくつていった。

大学の受験期が目前へ来ているというのに、みんなの出来は意外に悪かった。やはり共学でない女子高校のひ弱さであろうか。採点してゆく慶子のペンは重かった。

あと二枚。思わずペンを取落してしまった。瞳に不快な翳^{かげ}がさしてきている。

四問の英文和訳。だがその答案には問題とおよそ縁遠い文字が綴られてあつた。

第一問——地獄へおちるのは、それほど難かしいことではない。

第二問——我々はゲームをやっているのだ。社会と私との対抗ゲームだ。目的は非常に簡単だ。自分の好きなことを思う存分やるために！

第三問——父よ、遠慮なくこれを飲め。それでも効かないようなら私の手で絞めてあげますわ。

第四問——あたい、パンティを濡らしちやつたわ！

しかも筆者は採点する教師に挑戦するかの如く、はつきりと署名していた。

——高三C組羽鳥美千代。

慶子は、勝気で聡明な少女の顔を思いうかべる。物理学者を志して死物狂いの受験勉強をやつてきた。成績は拔群で、単独女子高校たるこの学園からの、最初の赤門入学者になるであろう、と期待されていた。家庭も裕福で、有力な実業家である父親は、現にPTAの会長もつとめている。

すべてに恵まれた少女と、このふてくされた文章——慶子はその繫つなぎめを見つけ出すのに苦しんだ。何か冷たい犯罪と、ただれた性の匂いがたちこめてくる。紙背にひそむ謎を解こうとあせるのであつた。

「真田先生、お電話です」

入口の処で、教員室付きの給仕が呼んでいる。

「どこから？」

「男の人です、先生」

少年は、ませた微笑をこしらえた。

「辞書の出版社の人でしょう」

慶子は硬い表情で席を立つた。ねちねちと食いきがつてくる営業部員の顔を思いだしたからだ。

「真田ですが」

事務的に云いながら、なおも美千代の近頃を考えた。たしかに欠席が多くなつたようだが……

——僕だよ。

人を食つた返事が受話器に響いた。

「どなた？ はつきり名前をおしやつて」

——恐いんだなあ、君、慶子ちゃんなんだろう。

「あッ！」

あやうく受話器をこぼしそうになつた。

——予定が變つて夜行になつたんだ。

「何時の？　今どこにいらつしやるの？」

カーツと燃えついてくる頬やこめかみ。胸はとんとんと響きを打ちはじめた。室矢武彦はまだ東京にいたのだ！

——十時二十分の準急にした。だいぶ時間があるんだ。食事をして、映画ぐらいは観られそうだね。君、こんばん暇？

「ええ暇。もちろん暇よ」

はずんだ声で落合う場所や時刻をとりきめていると、ゆがんだ生徒の問題など、跡方あとかたもなく念頭から消え去つた。若い女教師の心は、匂やかな彼女自身の世界へひた走りに戻つていつたのである。窓辺におかれた鳥籠の朱の色が、折からの西陽をうけて美しい影をひいていた。

二

——約束は六時半。

真田慶子は二十分ほど早く新宿駅へやつてきた。室矢はまだ来ていない。浅草で役人と会つてくる

というから、少し遅れるのかも知れない。構内の片隅に立つて待つことにした。

改札口からは、ひっきりなしに冬仕度の群衆が吐きだされてきた。壁にはめこまれた大時計を見つめていた慶子の眼が、ふと足もとの階段へ流れた。そこは地下食堂へ降りる階段であつた。

三年前の、あの黄昏^{たそがれ}がなつかしく思いだされた。

慶子はまだ英学塾の学生であつた。室矢武彦は、そこで言語学を担当していた若き講師、いずれは母校で助教授に榮進するだろうと噂されていた。

その日の午後。慶子たちは室矢に引率され、武蔵野の一隅にあるミツシヨン系の聾学校を参観した。音の世界から隔絶^{かくぜつ}された痛ましい子供たちの授業ぶりは、乙女らの胸をゆさぶつた。帰路みんなは変に黙りこんで、駅へ向かうくぬぎ林をぬけていった。

晴れた秋の日で、雲一つなかった。ふり仰ぐと、三機編隊のジェット戦闘機が矢のように中空をかすめて去つた。不思議なことにジェット機の爆音は、その機影と一致しなかった。つまり飛び去つたあとの青空に、どろどろと爆音だけが残っているのだ。

「あれが超音ジェット機だよ」

説明した室矢だったが、突然憑^よかれたように叫びだしていた。

「そうなんだ。文明は音を追い越して、あんなに先の方を走っている。それが、今観てきた子供たちはどうだ。全く音の世界から取残されている。音を追い抜くことには成功しても、取残された者を音

に追いつかせる方法を、誰もが知っていないんだ」

室矢の興奮は新宿駅へきても鎮^{しず}まらなかつた。慶子は魅入られるようにして、若い講師について、この地下食堂へ降りていった。

二人きりで語り合つた機会は、この時が初めてであつた。なぜ室矢が慶子だけを選んでお茶に誘つたのか、それは判らない。お互いに小田急沿線に住む——それだけの偶然にしては、この黄昏は余りにも重大な意味を持ちすぎていた。

コーヒーが冷えるのも忘れ、室矢は語りつづけた。言語学などという死んだ学問を捨てて、不幸な子供たちに生きた言語、唯一つの助動詞でもいいから理解させてやらなければならぬ——

聞いている慶子の眼に、一つの光りが点ぜられた。美しい女子学生は、若い学究のなかに素暗らしき男性を発見してしまつたのである。

室矢はこの決意を実行することをためらわなかつた。やがて慶子が英学塾を卒業し、本郷の高台にある女子高校へ就職した頃、彼はもう聾学校の平教諭として信州へ赴任していた。約束された助教授の椅子を惜しげもなく投げ捨てて。

山を越え、湖水を渡つてくる室矢の手紙には、不幸な子供たちへのひたむきな熱情があふれていた。慶子もまた、学園での日常を事細かに書き送つた。そして若い教師たちの文面には、いつか愛の言葉の数々がちりばめられるようになっていたのである。

(そうだわ、今夜のお食事はこの地下食堂で……)

慶子はこの思いつきに興奮した。室矢もきつと賛成してくれるだろう。階段の袖におかれた見本棚を覗いて、楽しい晚餐の品を、あれこれと物色しはじめていた。

あと十分――

改札口は新たな群衆を吐きだした。だがまだあのこげ茶色のオーバーは現われない。

慶子は少し冷えこんだ足先をほぐすべく、リズムをつけて足踏みした。すると唇から軽い歌声が洩れてきた。十分後に迫った今宵の幸福――慶子にはこの冬の夜が、自分たちのためだけに存在しているように思えてならなかった。

ひとしきりの雑踏が去つて、構内はまばらになつた。子供づれの若い夫婦が歩いてゆく。五六歳の男の児は両親の手にぶらさがり、ブランコをくり返しながら街の方へ出てゆく。

そんな微笑ましい光景に眼を奪われて、慶子はすぐその向う側を抜けてゆく人影を、あやうく見落すところであつた。

(あッ、あの子――)

白いセーターの上に紺のジャンパーをはおっていた。スカートはけばだったピンク色。学園では禁じられている長い黒髪を、腰の付近にまで垂らしていた。羽鳥美千代ではないか。答案に不敵な文章を綴つた羽鳥美千代ではないか。

慶子は、はじかれたように駆けだした。構内を出た駐車場の前でやつと追いついた。

「羽鳥さん」

呼びかけたつもりだったが、声にはならない。棒をのんだように立ち停まってしまった。

ひと目で崩れた様子が判る二人の若者が、美千代を迎えたからだ。

「ごめんね。ピアノの先生にねばられちゃったんだよ」

美千代の乱暴な口調が聞こえてきた。

そのまま彼女は女王のように若者たちを左右に従え、夜の街へ泳ぎ出てゆくのだ。

「辰ちゃん、あんまり食つかないでしょう。出来上がっちゃうじやないか」

突き放しておいて、天をふり仰いで哄笑する羽鳥美千代。慶子は通学の車中でも単語カードをくり

つづけていたこの間までの秀才少女を思いださない訳にはゆかなかつた。

ただれたネオンの海が、すでに濁流となりかけた美千代たちをのみこもうと待ちかまえていた。

瞬間、慶子は迷った。

もしここで美千代のあとを追えば、室矢とのだいじな今宵を失ってしまう。美千代には明日、学校でよく説諭してみよう。室矢との逢う瀬には明日がないのだ。

でも……と、慶子は考え直した。

真の意味での明日を待てないのは、美千代の方ではなからうか。お互いの愛を満たしあう前に、ま